

洛友会会報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

鳥養利三郎先生追悼号



先生於ける官舎に於ける

洛友会々々長鳥養利三郎先生には、昭和51年9月24日89歳の御長寿を全うされ御逝去されました。会者定離は世の常とはいへ、偉大な指導者でありました先生を喪つたことは痛恨に堪えません。ここに追悼号を発行して、先生の御冥福をお祈り致します。次第であります。先生にはここ二年間程は御老体を専ら御自宅にて御静養中でありましたが、御逝去の前日より食欲不振を訴えられましたが、枯木の倒れるように安らかに御永眠遊ばされた由承っております。

先生は京都市の名譽市民であらせられましたので、市の慣例によりまして市葬をとの儀もありましたが、鳥養家としては葬儀の一本化を強く希望され、公葬等一切を御辞退されましたので、御逝去の翌々日の26日昭夫人を喪主として、午後1時より南禅寺北ノ坊町光雲寺に於て告別式が執り行われました。光雲寺は臨濟宗南禅寺派の古い名刹で、94歳の稲垣乾同師は先生とは講師時代よりの御昵懇という深い縁の方でありました。告別式は同寺本堂に於て莊嚴にとり行われました。天皇陛下より祭幣を御下賜され、文部大臣、日本学士院長、京都市長、京都大学総長、その他より功績を称え、御逝去を惜しむ弔辭が、また数千通の用電が全国より寄せられました。

その後、さらに先生の御遺徳を偲びたいとの希いに、洛友会、京都大学、応用科学研究所三者の協力をもって、鳥養先生を偲ぶ会が開催され、改めて来会者一同今は故き先生に敬仰の誠を捧げました。

鳥養利三郎先生を偲ぶ会は、11月7日近畿地方發明センター講堂にて、近藤常任幹事の司会を以て莊重盛大裡に、松田会長代行の挨拶の辞より始められた。

一 挨拶

洛友会会長代行

松田長三郎

鳥養先生が亡くなられましたから早くも一カ月になり、追憶哀惜の情、愈々切なるを覚えます。先生は、去る9月24日、89才の天寿を全うされて、安らかに大往生を遂げられましたことは、誠に痛恨の極みでございます。鳥養家では、京都市公葬の礼を御辞退になり、9月26日南禅寺光雲寺において、鳥養家としての葬儀並びに告別式が執り行われました。

本日のこの集いは、先生に最もゆかりの深い京都大学電気系教室卒業生よりなる洛友会（先生はその会長であられました）、総長として御在官になりました京都大学本部及び教官各位、及び心血を注いで運営されました財団法人応用科学研究所の三団体が相謀り、この先生を偲ぶ会を催させて頂きましたところ、奥様初め皆様方には御多用中、又御遠方からも多数御参会下さいまして、誠にありがとうございました。本来な

らば、御関係の方々にも広く御案内申し上げるべきであります。極く限られた少数の方々の中に、御案内申し上げたような次第で、あしからずお許しをお願い申し上げます。

先生の偉大な業績に就きましては、今更申し上げるまでもありませんが、電気過渡諸現象、高周波焼き入れの理論的並びに実用化的の研究等、枚挙に遑がありませんが、同時に又多数の人材を養成して社会に送り出されたこと、これらの卒業生が学界・業界・財界に活躍されて、敗戦後世界も羨む我国の偉大な向上発展の一翼を担って来られたのでありますが、ここにおいで関西電力の芦原会長さんもその一人で、我国財界の指導者であられますし、その他大なり小なり斯界を動かす人材の多数は、先生の訓陶を受けた方々であります。又京大総長とされは、終戦後最も困難な時期に、2期6年間を我国の大学教育の基礎確立のために、大変なご苦労をなされ、そのご功績も甚だ大であると存じます。どちらかと言え、おからだは寧ろお小さい方が、学生時代からランニング・乗馬・スキーなどによって鍛えられたおからだは全身これ知恵、これにして直截果敢、正鵠を得たご判断

と毅然たる実行力とは等しく、皆の推服する所でありました。人物評価に酷しい文学部の名譽教授吉川幸次郎、桑原武夫両先生も、今巨大な陣容を誇る人文科学研究所の今日あるのは、全く先生のおかげであつて、先生がおられなかつたならば京大への移管は実現されなかつたであろうと言っておられましたし、又桑原先生も「先生は電気工学の大家ですけれども、総長としてのすごくえらい人だと思ひます。」と絶賛しておられますが、この人からこれ程の賛辭を得られるということは、余程の偉材であられたと言えましょう。当時はご承知の通り、進駐軍が絶対的の權威をもつていた非常にむづかしい時代で、困難な諸問題を次々と解決されて行かれたことは偉大と言わねばなりません。この席には当時の各学部長さんや諸教授、又本部当局の方々も多数おいで下さっておりますが、ほんとに手際よく果敢に処理されてゆかれました。その他、例えば進駐軍の指令による教官の復帰問題や、教官の適格審査の問題なども、教官を中傷するような投書が随分先生の所に来たようで、人間の見にくい一面をまさまじと痛感したとも洩らしておられました。先生の業績等については、大谷名譽教授が苦心して編集されましたスライドで後

程御覧願いますが、要するに先生が学者・教育者・教育行政の指導者として、日本学術会議、日本学士院会員等としても尽力せられ、文化功労者、京都市名誉市民、更には勲一等旭日大綬章、又従二位の追贈をお受けになるなど、学者として最高の数々の榮譽をお受けになり、又四千におよぶ電気関係教室の卒業生からも敬慕せられて、天爵人爵併せ得られて、89歳の天寿を全うされたことは、誠に幸福なご生涯であられたと存じます。

世の中は、これからは国の内外を問わず、益々むつかしい時代になって行きます。学術・技術も愈々新らしく発展しなくてはなりません。私共は先生のご逝去を、徒らに嘆き悲しむのでなく、先生の御遺訓の上に、更に新しいものを打ち立て創造し、前進して行かねばならぬと存じます。私共は先生の偉大な業績・ご遺徳を偲んで、感謝の誠意を捧げますとともに、先生の御遺霊の驥尾に付して、今後一層頑張らねばならぬと存じます。

ここにお集り下さいました皆様方は、何れも先生に対して色々と深い思い出をお持ちでありました。うし、先生を偲ばれるお話を伺いたいのでありますが、時間の関係上お許しを願って、あの掲示の

ような方々にお願ひすることに致しましたので、悪しからずご了承をお願い申し上げます。これ等の方々は御多用中、御快諾下さいまして誠にありがとうございます。

ここに皆様と共に、謹しんで先生の御冥福と、御遺族様の今後の御幸福をお祈り申し上げます。又御来会下さいました皆様方には、重ねて厚く御礼を申し上げます。ありがとうございます。

付記 なお、電気評論(昭和51年11月号)、電気学会及び照明学会雑誌(各12月号)に、先生を偲ぶ拙稿が載せてあります。

挨拶を終って、今は故き先生の御冥福を祈って黙祷、次いで先生の御略歴がスライドを使用しての大谷副会長の流暢洒脱なる解説を以て進められた。次に要点を記す。

在りし日の先生を偲んで

御誕生

明治20年2月8日、徳島県板野郡堀江村にて御誕生。葦葺きの御生家の写真を紹介。

学生時代の先生

明治39年3月 徳島県立徳島中学校を御卒業

明治42年7月 第三高等学校を御卒業

三高御在学中、脚絆の登

山姿、ユニホームに裸足の陸上選手姿等、先生の三高生時代の若き姿に感興す。
大正11年12月

京都帝国大学理工科大学 電気工学科を御卒業

大学生時代の同級生と御一緒にの写真、県人会の写真、京都電灯見学の写真等を紹介。

京都大学教官としての先生

大正11年12月 講師

講師任官当時のハイカラ写真

大正3年7月 助教

大正9年9月より11年11月の間

欧米各国に御留学

大正12年1月 教授、電気工学第

三講座を担当さる

大正14年7月 変圧器に於ける

過渡現象の研究を以て、工学博士の学位を獲得さる

若き日の教官として、教室先輩

教授等と一緒に撮られた写真、教室に於ける若き教授姿、乗馬練習中の白馬に跨がれた勇姿等、元

氣凛烈のお姿に若き日の先生を追

想す。

先生御壮年の御仕事は研究に学校行政に、文部省関係、財団法人

関係等甚だ多岐に涉つての御活躍

を項目別に追ってみることにす

(一)京大関係
昭和7年5月 評議員
昭和9年6月より12月の間

欧米各国へ御出張
昭和16年9月 工学部長
昭和20年11月より26年11月の間
総長

大礼服姿の先生、教室に於ける円熟の域に達せられた先生、終

戦改革という最も多難な時期に総長の重任を負われた先生、そして総長官舎に寛がれた和服姿の先生(上掲の写真)に往時の先生の御

苦勞を偲ぶ。

(二)文部省関係

昭和15年6月

学術研究会議会員

昭和17年12月

科学技術審議会委員

昭和22年5月

大学設立基準設定協議会員

昭和22年7月

大学基準協会副会長

昭和23年4月

大学設立委員会副会長

昭和24年9月

大学管理法案起草協議会委員

昭和25年2月より4月の間

全国大学学長代表として米國

へ出張

(三)日本学術会議学士院会員

昭和23年12月

日本学術会議第一期会員

昭和24年10月

日本学士院会員

(四)学会々々
昭和19年7月 電気学会々々長

昭和20年5月 照明学会々々長
昭和23年6月 繊維機械学会々々長

(五)財団法人関係
昭和14年11月 応用科学研究所理事長

昭和18年4月 軸受研究所理事長

昭和20年1月 生産科学研究所協理

昭和20年11月 有機合成化学研究所理事長

昭和22年1月 日本化学繊維研究所理事長

昭和22年10月 生活科学研究所理事長

昭和31年4月 防災研究協理

昭和42年5月 湯川記念財団理事長

昭和44年5月 応用科学研究所会長

柴田報国会理事

(六)名誉教授・その他

昭和26年11月 御退官、名誉教授

昭和27年11月 洛友会々々長

昭和36年8月 ユネスコ国内委員会々々長

昭和37年11月より12月 日本政府代表としてパリ・ユ

ネスコ会議に御出席

洛友会々々長御就任、教育会議、

ユネスコ会議に日本代表として海外出張等の先生御活躍のお姿に、一同深甚の感謝を捧ぐ。

主要研究業績

変圧器に於ける過渡現象

(学位論文)

過渡現象測定法

衝撃電圧発生装置

高周波焼入

紡糸用電動機

ヘビサイド演算法

送電線の進行波

非線型振動

セレンウム整流器

絶縁油の破壊現象

金属微粒子の製造

電気機器の騒音

芒硝水溶液

多岐多方面に渉る先生の御研究のテーマを紹介。次いで昭和42年10月文化功労者に表彰されたときのNHKテレビ放送のテープに、在りし日の先生の肉声をきき、一段と敬仰の念を新しくした。

受賞叙勲

昭和12年11月 勲二等瑞宝章

昭和15年12月 従三位

昭和36年10月 京都名誉市民

昭和39年11月 勲一等瑞宝章

昭和42年10月 文化功労者

昭和49年11月

勲一等旭日大綬章

昭和51年9月

従二位に追叙

御家庭に於ける先生

先生御新婚の当時より、御令嬢を囲まれて御家庭に於ける先生の御日常の御写真を披露。

晩年の先生

御逝去前約二年間を御自宅にて御静養の御写真、旭日章を受けられたときの御写真、御庭先の満開の桜花の下の御写真、先生最後の御揮毫(文末凸版)等に御静養中の先生を偲ぶ。

最後に御自宅にて御静養中の御姿を撮った16ミリ映画に、今は亡き先生への思慕を一層深めた。

昭和51年9月24日 入寂

御戒名 明電院工學利三大居士

合掌



次いで、先生と関係の深かった各界を代表する各氏より、思い出ることばがあった。

鳥養先生を想う

京都大学総長

岡本道雄

私は鳥養先生の御活躍なさってました頃は、一介の解剖学者でありまして、大学本部で何が行われているか全く関知していませんので、先生の思い出話をさせていただく資格はありませんが、先生の総長をなさっておられました時に、吉田分校の主事をしておられた平沢先生が今日おいでになるはずでして、先生であればたくさん思い出話がありましたのですけれど、ちょっとこの間から、身体を害されました、今日御出席になれませんでしたので、その代理を務めよ、というようなことで出していただきました。御勘弁願います。

私にとりまして鳥養先生についての思い出というか、強い印象を受けたのは、宮谷さん達が編集されました「敗戦の痕」というのを、読ませていただいた時でございます。現在の私の立場としましては、最も感銘の深いのは、あの内容にもられております敗戦の一番激しい世相の中で、京都大学を守り抜かれたという先生のあの御苦労話でございます。京都大学の総長と申しますのは、学内の事は勿論大変でございますけれども、又同時に日本の教育全体と申しますか、学外の仕事が大変多い訳でございます。あの激しい時代において、京都大学というものが日本の大学の中で果たして来た役割と申しますか、日本の大学の学問の自由を守るといふことと、進駐軍の命令、というこの二つの至上命令のようなものの谷にあつて、先生が苦悩しながら京都大学を守り抜かれたというお姿が、誠にその立場に立つものにとりましては身につまされて感じまして、深い感動を受けたのでございます。

特に先生が、教育制度が新制度になりましたので、教育課程というものを、お作りになります時に、教育刷新委員会の委員として、あの短い間にその構想をまとめられ、それを京都大学に実現して行かれる時の御苦労などは、その苦労を共にされた方がたくさんおられる訳でありますけれど、私はこの本を読ませていただくだけでも、恐るべき大きなお仕事であったと痛感するのでございます。しかし、先生が一番大きい夢を託されたのではないかと想像されますこの教育部、一般教育の課程が、現在大学の中で大変混乱と申しますか、最も大きい問題の一つとなっております。当時は、第三高等学校のありましたあの土地には、九〇〇の健児」と言いましたから、一、〇〇〇人そこそこの生徒がおったのでございましょうが、それが今五、〇〇〇人の学生があつた中でひしめきあつていふという状況で、物理的にも過密で大変な状態になつています。この制度は一つの理想として描かれ、かつ出発した訳でございますけれども、現実にはこれがなかなかうまく行かなかつた。特に宇治の土地で、広々とした大きなキャンパスを持つて立派な教育課程が成長するといふ先生の夢は果たされておられません。京大のみでなく教育課程は日本の高等教育の中で大きな問題点となっておりますので、この点仄聞しますと、現在東北大学などでは、今教育部が崩壊しかけておるといふ様な状況にあつて、いつでも大学問題の混乱の発火点になってお

るといふ状況でございます。これには制度そのものよりも、やはりこの世界情勢といえますか、思想の変転期と申しますか、そういう特別な時期に当たっているという背景もあると思います。何れにしても、この制度が発足しましてから、丁度今で30年でございます。そこでこの点につきましても、今もう一度考えてみるべき時が来ているのではないかと考えておりますので、この新しい制度の出版に当って御苦労され、本当に理想を持って新制度というものを確立されました鳥養先生を偲びます時には、これを継ぐ者として、この制度に対して今こそ大きな一つの総括をすべき時ではないかという風に、強く責任を感じておる次第であります。

尚、先生はあの敗戦の混乱の中を教養部という新しい制度をおつくりになっただけでなく、教育部とか今お話がありました人文科学研究所なども創設されるというような、大変大きなお仕事をなさいましたが、これらは凡て、先ほど松田先生からお話のございました鳥養先生のゆるぎない御性格の賜物であつたと思うのであります。

「敗戦の痕」について思い出しますが、その頃は大学院の特別研究生でございました。まあ少し

戦争のために研究なども本来の姿からゆがめたと申しますか、むしろ戦時研究というものをやっておりました。

敗戦の日放送をききました後というものは、虚脱と申しますか、呆然としておりまして、東山の通りに夕方電車が轟々と音を立て走ったのが、何か動いているものの中にあるという事に気が付いた、それショックを受けて呆然としておつたのでございました。そして又学問においても、今後の道を考えてお思ったり、かねてから大学を出て医者となつた者が大学で研究しておるといふよりも、やはり田舎に帰って医者をしてほしいというのが念願だつたものですから、そういうことを考えたりしてました。そんな時に鳥養先生が、大学というものは如何に環境が変わつても、教育研究を播ぎなく続けるのが本当だということをお考えになつて、一教授として少しもその研究態度をお変えにならなかつたという話を承りますと、元来、先生はいつの世に大学院を背負つて立つ資質をもつておいでになつたことをつくづくと感じるのであります。お蔭で京都大学というものがあの混乱の時代におきまして、学問研究の中心としてりっぱに生命を守り続けたと思ひます。又、先生は御退官の

後も一筋の道といひますか、御専門の道とそれから教育というものから離れられないで、この教育研究一筋に一生を貫かれたという事は、りっぱな一生であつたと思ひます。その様に、学問研究を中心に京都大学を守つていただいたお蔭で、その後御承知の通りノーベル賞学者も出ましたし、私は本年の文化勲章の授賞の選に当りましたが、京都大学からは何の領域にも雲の上に峰々が聳える様に、秀れた人達がたくさんおられまして、いろいろ問題はありますが、京都大学の真の力と申しますか、その様なものを實際見せてもらった気持ちで致しまして、感動した事でございます。

これも敗戦時のあの混乱の中にあつて、京都大学をお守りいただいた成果であると思つています。今日は先程申しました様に、思ひ出を語る資格はございませんですが、平沢先生には恩師という、それからまた奥田先生の時には学生部長などをいたしました、前田先生の時には医学部長として、親しくいろいろのお話を承ることが出来たのですが、鳥養先生からはそういう機会がございませんでしたので、今日は今からいろいろのお話を承ることが出来ますことは、私にとりまして大変有難いことでございます。その意味でこれから

鳥養先生を偲ぶ

京都大学名誉教授
阿部 清

一つ感銘を受けながら、お話を承ることを期待いたしております次第でございます。どうも有難うございました。

私は大正7年、京都大学電気工学科を卒業した阿部です。

学生時代より今日迄、鳥養先生の特別な御世話になり、従つて短時間で思ひ出話をする事は出来ないが、今感じていることを皆様に初めて御紹介したいと思います。

私が学生時代電気教室の製図室より道具を持って帰ろうとした時、丁度鳥養先生が部屋から出られるのに出会われ、先生はニコニコし乍ら「君は、もう製図の期限がすんだのに、今頃迄何をして居るのか」とお叱りになつたが、直ぐ「あゝ分つた、期限内に遅れた人の手伝いをして居たのだな」とお笑いになつた。その頃の教室は和気藹々、学生の半数位は期限内に遅れるのが慣例であつた。

卒業の時、鳥養先生より「君は卒業が近づいたが就職は決つたか」と問われた。その当時、教室幹事であつた青柳先生から卒業したら、直ぐアメリカ、ニューヨーク

クのエムパイビルにある日本人の事務所、先づ二年位英語の勉強をして、それから専門の勉強をしたらどうか。又、内地にも二三君をほしいという所があるがどうか？と言ふお話があつた。私は外国行きには少し未練があつたが、母が43才で亡くなり、父は57才位で当時として親兄弟を見捨てて外国に行くことに迷つていたので、その旨を鳥養先生に申し上げたら、先生は暫く考えて居られたが、その挙句「うん、分つた、僕からうまく断つてやる。四、五年教室で勉強せよ」と言われた。青柳先生は「実は君に研究所(青柳研究所)に残つて貰いたかつたのだが、自分が理事長であるので、君に言いくかつたのだ。然し、君が残ると言うなら、丁度助かつた」と言うことであつた。此の事を教室の元老の難波先生に申し上げると、先生は「君の様な十貫目もない様な体格では、現場では身体が持たぬから、教室に残るのがよからう」と言うことで、三人の大先生の御推薦で現在の応用科学研究所の前身の青柳研究所には入り、そこで十年先輩の上林先輩(物理及び電気出身の先輩)の指導を受け、研究が如何にむつかしいかと言ふことを教わつた。外の人より遅れた感であるが、それから後は退官の後、同志社大学或

は、その旨を鳥養先生に申し上げたら、先生は暫く考えて居られたが、その挙句「うん、分つた、僕からうまく断つてやる。四、五年教室で勉強せよ」と言われた。青柳先生は「実は君に研究所(青柳研究所)に残つて貰いたかつたのだが、自分が理事長であるので、君に言いくかつたのだ。然し、君が残ると言うなら、丁度助かつた」と言うことであつた。此の事を教室の元老の難波先生に申し上げると、先生は「君の様な十貫目もない様な体格では、現場では身体が持たぬから、教室に残るのがよからう」と言うことで、三人の大先生の御推薦で現在の応用科学研究所の前身の青柳研究所には入り、そこで十年先輩の上林先輩(物理及び電気出身の先輩)の指導を受け、研究が如何にむつかしいかと言ふことを教わつた。外の人より遅れた感であるが、それから後は退官の後、同志社大学或

は応用科学研究所に関係し、鳥養先生の御指導を受けた。私の如き鈍才が秀才の集まりの大学のなかで、一人前の学者として過し得たことは、先生が助けて下さったお蔭であり、この御恩は何時迄も忘れ得ない。死ぬ迄学問を続ける様言われた鳥養先生の御薫陶を忘れない。ここに心より先生の御冥福を祈ると共に、今日の会で話すことを感謝する。

■鳥養利三郎先生

を偲ぶ

関西電力会長

芦原 義 重

鳥養先生が故くなられてから、はや一カ月余りが過ぎ、時の流れのはやさにただ驚くばかりでございます。

実は私、ご生前の先生に、多忙にまぎれて暫くお目にかかっていなかった上に、ご逝去のしらせを受けたときも、よんどころない事情があり、どうしてもお別れに参ずることができませんでした。そのことが本当に残念で、悔まれてなりません。

しかし、本日漸く皆さまとともに、こうして先生をお偲びする機会を得、多少とも心を安んずることができような気がいたしてお

ります。

「棺を蓋うて事定まる」と申しますが、親しく先生に接していた日々が遠のき、今あらためてそのご生涯に思いを致してみますと、今更乍ら先生が如何に偉大な存在であられたかということをつくづく感ずる次第でございます。

先生が学問と大学教育に残されたご足跡は余りにも大きく、ここでそれを言い尽くすことは到底できませんが、有名な「高周波焼入れ」をはじめとする数々のご研究は、わが国産業界を一変させるほどの画期的な意義をもつものでございました。また、あの終戦直後の混乱期に京大総長に就任され、母校が伝統とする自由な学風をあくまでも守りつつ、新制京都大学設立の立役者として力を尽されたことは、いまなお記憶に新しいところでございます。

先生から直接にご指導を受け、ご薫陶を仰いだ私にとり、それらにもまして忘れ難いのは先生のお人柄でございます。先生の学問に対するひたむきな情熱や信ずるところを貫き通すあの信念と気骨を、私どもは少しでも自分のものになりたいと思つたものでございます。また、先生は何よりも人と人との心の触れ合いを大切にされ、私どもにも常に胸襟を開いて暖かく接しられました。学問の師

としては勿論、人生の師として、親しく先生の警咳に接することのできた私どもは、実に倅わせであったと存ずる次第でございます。

それだけに、もう再び先生にお目にかかれたいのはまことに心寂しく、またご生前、十分ご恩に報いることができなかったことを残念に存じます。ただ、一昨年先生が米寿を迎えられたとき、皆さまのご協力を得て記念出版をさせていただき、先生に大変喜んでいただいたことが、今となってはせめてもの慰めであろうかと思っております。

本日は、皆さまもども、鳥養先生を偲びながらこのひとときを過ごしてまいりたいと存じます。先生のご冥福を心からお祈り申しあげまして、私のご挨拶を終らせていただきます。

■鳥養先生を偲んで

元神鋼電機常務取締役

田 中 卓 次

在学当時を受けた先生の講義で電気磁気総論、交流理論、高周波工学等のノートは、製本の上今尚保持しています。今これを開いて見ると、本館前の別教室で、高周波回路図を画いた黒板を背に講義中の先生のお姿が目前に浮びま

す。

私達の卒業祝賀の宴が電気教室の諸先生列席で、円山公園内の料亭で開催されたとき、鳥養先生を囲んで、我々今後の処世につき種々貴重なお話を承りました。又宴終了後、列席中の石川芳次郎氏に先生と共に我々数名を二次会に連れて行って頂き、楽しく過したことを記憶しています。かかる事柄が私の人生に甚だ有益でありました。

卒業の後、鳥養先生の御推挙で神戸製鋼所鳥羽電機製作工場（現神鋼電機）に就職しました。

当時の小田嶋工場長は先生と同期であります。入社早々工場長私宅に初めて招かれ、少々堅くなっていたのですが「君のことは鳥養君より聞いている、遠慮せずに飲め」と言つて頂き、急に気楽になつて、以後工場長とも気易く話が出来ようになりました。

先生の好意ある御紹介のおかげと思っております。

入社の翌年、昭和2年鈴木商店が倒産して、子会社の神戸製鋼所の整理に伴い、電機工場の存続が問題となり、閉鎖寸前になっておりました。このとき神戸製鋼の田宮専務（後の社長）が先生に電機工場を継続すべきや否やの相談があり、先生は「数年続けて見て後

されて、二〇〇名余の従業員で存続されることになりました。

先生の御進言が無ければ、今の神鋼電機は存在していないでしょう。又、私の人生も変つていたでしょう。

このため、昭和三年春より顧問役として毎月鳥羽工場に来て頂き、御指導を受けることになりました。

先生は「こんな小工場は、大会社と同様の製品を考へてはとて大刀打ち出来ぬ。大会社の手付けられないものを選ばねばならぬ」として、先づ人絹紡糸用のポットモーターの性能向上に全力をそそぐことになり、先生の御来場日に合して毎月会議が開かれました。

この研究の成否が工場の存続に係つているので、実に真剣な議論が行われ、時には夜、先生の宿舎である工場長私宅で、夕食後も検討が行われたことが度々ありました。

又、時々料亭に於て若者を集めて慰勞宴を開かれたこともありました。或るとき先生は、「田中君踊りを教えてやろう。今後こんな機会が多くなるだろうが、宴席で座っていると酒を飲み過ぎるものだ、踊っている間は飲まなくてよい。発散もするし、座持ちにもなる」として、串本節の踊りを教えて頂いたことがあります。「開い

て結んでチェン、一、二、三」の如き調子で動く体操類似の踊りがありますが、結構楽しい雰囲気になったものです。

ポットモーターの研究、試作、検討を毎月繰り返して、一カ年余り続けて、ようやく人絹会社に認められる製品が出来ました。幸にも人絹業界の急速の発展に伴い、ポットモーターが全国的に採用されて電機工場発展の基礎が出来ました。田宮専務に進言のこともあり、先生には大変喜んで頂きましたが、先生には神鋼電機の育ての親とも申すべきであります。

昭和13年以降、戦時体制によりポットモーターの生産中止後はこの設備を航空電機の生産に切替えました。航空電機は一般電機とは大変異り、特殊部門で大会社の関心薄いものであり、先生には引続き御指導を頂きました。空襲警報下の鳥羽へ、布製のカバンを肩に、妹尾氏(同期生)と共に来場のお姿に接し、私達も励まされたものです。

顧問役としてかく長期に亘り情熱をもって事業に入り込み、御指導を頂いたことは、同期生への友情の厚さとともに、子弟に対し深き愛情を頂いたもので、感激した次第であります。

終戦後早々先生が京大総長に就任されて、お祝いに参上したとき

「今後君の会社の顧問役は辞める、代りに林(重憲)君を推薦する、打合せ給え。君の会社とだけでない、今迄関係した凡ての会社より退く。総長職に就く以上京大の権威の為に、他の会社に関係するわけにいかぬ」との御話を聞き、終戦直後の占領軍政下の大混乱時代に総長に就任される確固たる信念の程を承り、敬服した次第であります。又六カ年の総長職を終えられ、他の数大より学長に推挙を受けられながら辞退された時にも、「京大総長の職にあつたものが、国内の他の職に就くことは、京大の権威を汚すことになる。京大の名譽のためにも辞退せねばならぬ。今後は国際的仕事以外は皆辞退するつもりだ」との一貫したお話を承りました。

其の後、先生より頂いた書籍「敗戦の痕」を精読し、先生の在任六年間は各種事件の続発で、最も御苦労された期間でありました。京大の権威を保ち、断固として研究の自由と学園の自治を守り、戦後大学教育の方向を確立されたことは、一般のよく承知しているところであります。

心安らかにお眠り下さい。先生より頂いた書「徳不孤」は、今も私の座右の銘として保持しております。さようなら

さようなら

鳥養先生の思い出

鳥津製作所社長 上 西 亮 二

「丸い豆腐も切りようで四角

本日は誠にゆくな先生のご遺徳を偲ぶ会ということでございまして、この場のふんい気になつてとそぐわない駄じやれのような言葉を冒頭に申し上げるのははなはだ恐縮するのをごいしますが、実は私の忘れられない先生のお言葉に「丸い豆腐も切りようで四角、ものもいよいよ角が立つ」というのがございます。この言葉が先生と私との長い歳月にわたる関わり合いでいちばん心にしみる言葉となつておるのでございます。

昭和の始めごろ、先生のお供をしてよく祇園町のお茶屋へ遊びに行きました。そのことをいまここで告白いたしますが、先生お得意の手おどりは「丸い豆腐も切りようで四角、ものもいよいよ角が立つ、ヨイトマカセッセヨイトマカセッセ……」と、それはまことに堂に入ったものでございまして、おどり終えた先生が「上西、お前、気をつける。世の中こんなものぞろ」といわれたのが妙に忘れられません。私はこの「ヨイトマカセッセ」とはやされる歌の心に先生の深い哲学を見出し、私はこれを座右の銘として大事にし

ております。そのようなことで、きょうの思い出話のはじめにこれを申し上げたようなしないでございませう。

「漢文をやれ 先生と私の出会いと申しますが、プライベートなことになりませんが、実はきょうこの席にお越しただいております先生の奥様が、私の叔母と女学校時代の同級生であられたのをごいしまして、中学生時代に「私は将来電気がやりたい」、それでどうしようかと思ひ叔母を通じて先生にご相談にあつたというわけです。いまから五十何年、六十年近く前の話です。

それで、おそるおそる一条新町の先生のお宅へ伺うと、「受験勉強なんかやめとけ、漢文を勉強せい」ところおっしゃる。当時、中学四年の私、「漢文勉強せい」とは、えらい変つたことをおっしゃる先生やなと思ひながらひきあげてきたことを憶えております。先生の御指導の中には漢学的というか儒教の精神が脈々と流れていたように感じます。これは皆様の中にもご同感の方も多いと思ひますが、とにかく中学生の私が電気をやりたいといったとき、「まあ勉強はそこそこにして、漢文をやれ」と、いわれたことも私の一生忘れることのできない出来事のひとつでございます。

もうひとつ先生の研究に取組まれる態度のことですが、先生はひとつの目標をきめる。研究なら研究、事業なら事業の目標をきめるとする。だれしもそうですが、目標を達成するということが重要でございます。このとき先生は「目的を達するための手段、そしてその手段からでてくるいろいろな派生的なこと、この派生的なことが実は貴重なんだ。道草をくつていようだが、道草は大いに食え、むしろその道草のほうが大きい成果をあげる場合が非常に多い」と、ころおっしゃるのですね。

私、この話も立派な哲学だと思ひます。これも私の忘れ得ない先生のご訓辭のひとつでございます。

「専門にこだわるな 研究に於いてのお考えでは、電気専門にこだわるな」ということを先生はよくいわれました。「自分の専門は電気や、電気や、いうてこだわってはいかん」「物理も化学も、電気も機械も、そんなものは皆ひとつのサイエンス、同じことなんだ」と。また「君たち若い者は、化学と電気の間をやり、物理と電気の間をやり」ともいわれ、私はこのものの考え方も感銘をうけております。私はこ

とつてでございます。

とつてでございます。

とつてでございます。

んな批判を申し上げる立場でございませぬが、昭和十年代と思いませんが、各大学に電気工学から分離して通信工学教室の創設が相ついでことがございます。しかし、京都大学では通信工学教室をお作りにならなかつた。「通信も電気もいっしょなんだ。ひとつのものを細かく分離する必要はない。文部省予算の獲得の手段かも知らんが、セクションを多く割るのは、私はどうかと思う」と、おっしゃったことを憶えています。

そういうわけですから、研究もそうでしたが就職についても、電気だから電気会社へ必ず行く必要はない。電気から人絹会社へ行く人も必要だし、機械屋になることも通信屋になることもいい。そんなわけで、先生がたくさん応用分野の会社へ学生の就職をお世話なさったことを記憶しています。

—文献をよむな

話がだんだん細かくなつて恐縮でございますが、先生は研究の過程で文献をお読みにならない。そして私たち弟子にもこれを非常に強くおっしゃる。本を読んでいると叱られる。また「どこそこの文献にこういふことが書いてあります」と申し上げると、先生はそれを全然うけつけられない。そして「物を実験せよ、自分で創造せよ」。きょうは先生のご高弟の林

重憲先生がご病気でお見えになっていませぬが、林先生は実験でなく、もっぱら理論式で攻められる。林先生も鳥養先生と同様に文献をお読みにならない。いつでもポケットに紙片かノートを入れておられ、喫茶店などで鉛筆で自分の構想をお書きになっている姿をよくお見かけしました。この二人の先生は、人の文献を読んでおつてはダメだ、創造性は人のまねからは生まれまいという、非常に強い信念をもつておられたように思います。

—少々間違つても部下を信頼せよ
私は大学においても、また企業にかかわつてのちもいろいろ先生のお世話になりました。私が先生のもとへ研究報告なり計画なりをもつてあがりますと、それを決してお直しにならない。どういうわけか「君これでいいか」と聞かれる。「ハイ」と申し上げると、「君の返事、ちょっと頼りないな。もういっぺんよく読みなおして見い」といわれる。仕方がありませんから、さらに読み返し直して、またもつていくと「君これでいいか」、こんどは読み返しておりませぬから、前よりもしっかり「ハイ、よろしゅうございませぬ」というと、先生はやはり全然ごらんにならないが、OKになる。提出したものをご覧になった

ことがない。私が会社で仕事をするようになってから、あるとき先生は「君、部下からね、ものを持つてきて、上の者がちよかちよか直すようなそんなことでは、部下はだめだよ」というわけなんです。「持つてきたら向うをむいて、こう返せ」と、これが先生のビジネスの行き方なのですね。それだけに部下を信頼する。信頼できる部下を育てねばならない。「少々間違つてもよい、これでいくという信念を通せ」と、こういうお気持ちであつたと思います。私の敬服するところでございます。

以上思いつくままに駄弁を申し上げましたが、先生をご追悼申し上げる話は尽きません。いづれにしても「丸い豆腐も切りようで四角、ものもいよいよ角が立つ」という卑俗かも知れませんが、先生のごお言葉を、座右の銘として私で申すことを申し上げて、きょうの集いにおける私の責を終らせていただき、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。次第でございます。

□鳥養先生を偲ぶ

元京都大学事務局長

内藤 敏夫

私が鳥養先生を直接に存じ上げ

て居りますのは、先生が総長になられたから以後のことです。此の席に立ち御話申し上げますが、必ずしも適任でないかも知れませぬが、何か話をせよとの事でありませぬので、簡単に申し上げます。私は京都帝国大学と称して居つた頃の最後の書記官として京大に赴任して参りました。が、これは鳥養先生の御尽力によるもので、阪大より母校に赴任することとなりました。鳥養先生が総長の御在任期間は連合軍の占領統治下に入った昭和20年秋より講和条約の締結された昭和26年

暮れまでの満六年間で、この間は日本、ひいては京都大学がはげしい変転に喘ぎ乍ら夢中で仕事をした時代で、鳥養先生はその意味でも歴代の総長のなかでも、特に御苦勞御心勞が多かつた数年を過ぎられた方でありました。敗戦のみじめさは想像以上で、占領統治下にはいつた後、虚脱状態にあつた隙に乗じて、思想団体或は政治結社が勢力の拡張を図つて、社会秩序の混乱さえ企て様としたかと思われた時代でありました。戦後初めて警察権を導入したのは京都大学で、これは昭和24年病院の看護婦の不採用事件に端を発した事件でありました。全く当時の御苦勞は大変なものでありました。その後は毎年のように学生事件が頻発

する時代に入つてくるのであります。先生の御人柄を一言で評することは出来ませんが、日常先生の側近にあつて、私の感じたいくつかのことを極めて短かい言葉で申し上げますと、そのひとつは先生は大学総長のポストを名実共に大切にされた方でありました。即ち、総長在職中は斯くあるべし、総長をやめた後は斯くあるべしと総長という責任ある立場を考えて、終始御自分の一身上の進退をきめられました。総長を辞められてから他の国立大学より学長にどの招聘が再度ありましたが、即座にこれ等は拒絶されました。このことからも先生の御性格なり総長に就いての御考えがわかれると思ひます。

先生は信念が強い方でしたが、決して頑迷固陋ではありませんでした。自分の意見をはっきり申されますが、よい意味での妥協も併せて持たれる心の広い方でありました。第二に、御性格が明るく社交上にもよく努められたが、私事に就いて困つたこと、御心配なことがあつても、その御気持ちや態度を外に現わしたりは決して示さなかつた方でありました。酒をたしなまれませんでしたが、酒席に出られましても座がしらけるようなことはありませんでした。

私事に関して他人に迷惑をか

けたくないという御気持ちの非常に強い方でしたが、しかし後輩或は部下の面倒は非常によく見られました。占領治下で公職追放とか

る希望や要求ですが、これらについては総長の補佐役、いわば副総長の様な人はありませんでした。従って、学部長或は研究所長、ま

山への投書が来ましたが、進駐軍の間に立ち、しばしば苦勞され、教職追放に就いては出来るだけ弁明され、又追放された方に就いては

たは側近の我々の意見を徴されて、それを参考にされる程度で、すべてひとりでおきめになりました。大学のキャンパスの中での総長のポストは孤独であるという感

その復職に努力されました。これは先生の大きな功績の一つであったと思います。又、一般の職員に

あると同時に、教育行政の実務に通じ管理能力に優れることが必要で、先生は全くこれにピッタリと

た。先生は年をとられてからも老人扱いされることを非常に嫌われました。気分のお若いせいもある

とられた態度は、その情勢の下では常に最善の策であって、次善の策というものは一つもありません

さず御出席になりました。杖をおつきにならないとあぶないですよと、申し上げましたが、最後まで

る最も適格な人物であられたことを、後になつてもしみじみと感じました。先生をはじめ、その時代の

お使いになりませんでした。小柄でしたが満身これ肝つ玉という極めて大胆であり、かつ同時に細心の方でありました。そうで無ければ

置などを書きとめておきました。先生の明るい御性格と逸話の思い出も多くありますが、時間の関係で省略致し、先生の御冥福を祈り、徳島県の生んだ立派な先生に

鳥養先生を偲ぶ

応用科学研究所理事長 吉田 洪 二

私は昭和6年の京大電気工学科の卒業であります。卒業直後の数年を除いて、あとずっと先生のお膝下で御薫陶を賜りました幸福者であります。総ゆる点に於て、鳥養先生程のお立派な方は、

けないから注意をせなければいけないが、急にどうというともない」との言葉を奥様より承りまして、先生にはお目に掛らず玄関先

した。高周波焼入れについては、大会社よりいろいろと話があったようですが、全く問題にされませんでした。セレンウム整流体についても全く同様でした。今日でこ

なかなかにこの世でお会い出来るものでないと思っております。そんな方から親しく御薫陶を得ましたということは、私はなんと幸福者であったかと、つくづく感じて

昭和14年青柳先生が主宰されておりました青柳研究所を改組し、応用科学研究所を創立されました、すぐ始められたのが高周波の電力

で、一旦人を信用したら、悪評を言う人があつても意に介せず、信頼の程度を変えられませんでした。先生は「人の和」に就いてはこ

2年程は自宅で御静養されておりました。時々状況報告に参上致しますと、嬉しそうにしていられた

また、当時大学の研究室では、セレンウム整流体の研究が進められていました。当時半導体といえ

だ、信念を託けて付和雷同してはいけないと訓されました。人から揮毫を求められると、よく論語

お没くなりになりました前日に少しお熱があり、食欲がなくなつたとのことをお聞きしましたので、その翌日午後2時頃常務理事

た。先生は何事によらず、一旦こうと決めたら変更を許されませんで

庸にある言葉で、前の「和而不同」と同様の意味と存じますが、どうして論語から中庸に変えられ

たのかお聞ねしませんでしたので、今となってはわかりません。また、人資源ということもよく言われました。機械はすぐにも買うことが出来るが、人はそうは行かない、長年月かかって育てなければいけない。だから会社では景気の良い悪いにかかわらず、常に少しづつ採用すべきだとよく聞かされました。全く往時の島津藩の「人を以て城となす」の思想で、このことは先生の隨筆集にもある通りであります。

先生の理解力の速いこと、これに従って判断力の速いこと、これは皆さんの申される通りでありますが、洞察力の鋭いことも申し上げねばなりません。恐る恐る先生の前に伺いますと、先生には既に何を言わんとしてやって来たかがわかるのです。先生の方から先手をとって話され、そして「それはどうするんだ、結論は？」と問われます。先生には途中の説明は全く不要なのです。

先生は何事も無理をせず、自然にまかせざることを尊ばれたようです。所謂、小細工は戒められました。失業しても決してアセルな、アセツテは録なことはない。世間が放っておくものでないとはよく言っておられました。自然にせよということ、一番印象が深かったのは終戦のときです。普通に仕

事をし、普通に実業をせよといわれまして、研究所では終戦の日でもいつもの通りやっていたことを覚えていきます。

私に与えられた時間が来たようです。私共は力を合せて、先生が残して行かれた研究所を立派なものに致すべく、一路邁進いたしますことを申し上げて、先生を偲ぶ言葉を結びます。

□恩師を偲ぶ

京都大学名誉教授
大阪工科大学教授
昭和9年卒

林 千博

鳥養先生の門下生として本日の会合で先生を偲ぶ言葉を述べさせていただきますことは、私にとって非常に感激に堪えない次第で御座います。いまさら申し上げる迄もありませんが先生には幾多の優れた人材を御育成になり、私の如き者が御話申し上げるのは誠に心おこがましい事とは存じております。しかし私も多年先生にお世話になった者の一人として、日頃先生にお目にかかる度に感じておりましたことを少し申し上げたいと思えます。私の先生に対するこのような気持は、過日先生の御葬式のときに読まれた日本学士院長和達清夫

氏の弔辞にも非常に適切に述べられてますので、同氏のお許しを乞うてその一部を讀まして頂きませう。それには「学士院にて後進の研究を紹介、顕彰されることに非常に熱意を示されました。このことは先生の真摯な学究的態度を示す例証（あかし）であるとともに、同学諸氏の研究に対する深い愛情と理解の現れであると申せましょう。最後まで精勵克苦、御研究の情熱を持たれ、身を持って研究者のあるべき姿を示されたことは後進を奮奮させるものがあります。」と述べられました。この御言葉は私の場合にも全くその通りあてはまるので御座います。以下私事に亘りまして恐縮ですが、これは先生が後進に対してどのようにに接せられたかとゆう一例としてお聞き願えれば幸です。例えば私が先生の御指導により初めて論文を書きましたとき、先生には工学部長、引続いて工学研究所長として非常に御多忙でしたので、呈出した原稿にざっと目を通して頂ければ有難いと思つてました。ところがしばらくして先生から返して戴いた原稿は題目から変って赤インクで真赤になっており、多いところでは原稿の半分以上も訂正されていきました。その後学位論文として提出させて頂きましたが、私にとっては後に戴いた学位記よ

りもこの真赤に訂正された原稿の方が有難く、今も大切に保存させて頂いてます。この先生の厳格な御叱正と後進に対する御懇情はまさに和達学士院長の言われた通りでありまして、先生の終生を通じて変ることなく、実は先日先生の忌明けの法事に御伺したときにも奥様より残っていた原稿を返して戴いた次第でした。それには先生の御訂正とともに御意見、御感想が刻明に記されていきました。またかつて私が書きました英文の著書が先生に差し上げましたところ、それからしばらくしてたまたま先生が取り出されたその本の表紙カバーが破れん許りになっていました。それを見た私は80才を越された御高齢の先生がそれ程まで詳しく読まれたのかと気付くと、思わず目頭が熱くなり、言葉では表せない胸に迫る感動を覚えたので御座います。本当に私にとっては恩師以上の父とも仰いだ方で、先生が亡くなられたあと何か身近にぼつかりと穴があいたような気が致しております。

先生には勿論後進に対する御指導だけではなく、各方面に幅の広い御活躍をされましたことはいずれも御承知の通りであります。特に先生が京都大学総長をされました終戦直後よりの数年間は、連合国軍による教育制度の改革とそれに伴う管理政策が次々に打出された教育の激動期でありましたが、卓絶した行政によってその難局を切り開かれた許りでなく、戦後の大学自治、研究の自由を確立され、また大学施設の拡充にも大きい成果を残されました。先生のこれらの御業績と申しますかその御苦心の程については、先生より戴いた「敗戦の痕」を拜読してその一端をうかがい知ることが出来るのであります。また先生の米寿をお祝して出版された隨筆集には、高い御見識に基づき先生の教育への熱情とともに、多くの人達に対する濃やかな愛情が随所に満ち溢れており、先生のお人柄に思いをはせながら、いつまでも教えられるところが多いのであります。長年にわたって御指導を受けた私たち門下生は、先生の偉大な御業績と高邁な御人格を偲びつつ、心から御冥福をお祈り申し上げます。

最後に近藤常任幹事より、心に沁みる次記閉会の挨拶が述べられました。

只今、各界の方々よりいろいろなお話を伺いました。我々のような若輩がはじめて耳にするようなお話もございまして、先生の学者としての御研究の教々、或は大学行政にお残しになりました大きな業績、それにもまして、私に強い感

銘でございましたのは、やはり先生の間性、深い抱容力のある人間性だと存じます。皆様もそれぞれの先生方の講演を、または思い出のお話を感銘をもってお聞き下さったことと存じます。

お話いただきました諸先生方には、お忙しいなかをわざわざ本会のためにおいで下さいまして厚く御礼申し上げます。

幽明境を異にするという言葉がございます。しかし、ここにあります鳥養先生のお写真のお顔も、只今のお話を一つ一つ傾きながらお聞き下さったのではないかと存じます。しかし、いま拝見しますと心なしかお顔の御表情も柔かく綻びるような感じをもって、私、御見受けする次第であります。

こうした偉大先生を亡くしましたことは、非常に大きな悲しみでございますが、生あるものの常としまして、89歳の天寿を全うされましたこと、私共は心から先生の御冥福をお祈りしますと同時に、また先生から賜りました御教訓の数々を明日の活動の糧にしたと思う次第でございます。

それでは以上をもちまして、鳥養先生を偲ぶ会を閉じさせていただきます。



寄稿

鳥養先生の思い出

大正7年卒

各務米次郎

忘れもしない大正15年6月、僕は黒部第1発電所柳河原6万キロをやっていた時、青柳栄司(東大明31年)、本野亨一(京大明35年)、大竹太郎(京大明39年)、鳥養利三郎(京大大1年)が黒部を視察に来られた。その頃第1発電所には大正4年の浦野兼吉、僕、大正14年の大久保達郎の諸君が出迎え、先づ第1発電所から取入口、それから鐘釣温泉、小黒部川、猿飛の奇峡、樺平、本流の釣橋を経て支流の祖母谷迄行った。尤も大竹先生は釣橋がこわいので引返して鐘釣温泉で一休み、この橋を大竹返しと言う。他の3人の先生に祖母谷の野天風呂を案内し、全員引返し、その晩は宇奈月の某旅館で一晩の歓楽を楽しんだ。鳥養先生はその頃電気磁気学演習を受け持たれていた。C.N.I.など未だに思い出される。青柳さんは、黒部の橋の上からパチリパチリと写真を、又本野さんは子供のためにカブト虫をさがされていた。その頃は皆御元気でしたが、今は50年の昔で、皆あの世に行かれた。鳥養先生は、たしか昭和16、17年の頃

満州新京に来られ、雷に関する講演を電気学会満州支部(支部長は僕)で行われた。その際地上雷雲は正で何もない。平らな大地は負の落雷で大地に雷フンがある。富士の裾野には沢山あるとの話だった。また23年の頃京都で洛友会成立の時の音頭取りも鳥養先生でした。皆懐かしい思い出ばかりです。

鳥養先生の思い出(二)

日立建設相談役

大正14年卒

橋本真吉

鳥養先生が亡くなられた。鳥養先生は我が京都大学にとって大きな存在であった。私等は、その鳥養先生に直接教えを受けたことも亦有難いことである。ここに先生から感銘をうけたお話の一つを記して、今は亡き先生への思慕と感謝の微意に代えたいと思う。

鳥養先生が京大総長を辞任されて間もなくの頃、御上京の機会に十四日会(大正14、15年卒の同窓会)のメンバーで、一夜日立の小石川寮に先生をお招きしてささやかな謝恩の集いを催した。その時の先生のお話は貴重な人生訓として、私の記憶に今も新たなものがある。概要次の如くである。



て重要な時に2期勤め上げ得たことは、誠に幸運であった。自分よりもっと立派な京大総長がかつて何人か居られたと思うが、在任期間の一番長い点では、自分がレコードホルダーになった。自分には必ず運というものがあつた。つきが悪ければいくら優れた人でも不遇に終ることがある。昔の海軍でも、つきの良い艦長が乗ると乗組員全員、誰言うもなくあの艦長ならこの軍艦は絶対不沈艦だと言う。自信に沸いて大いに振うが、もつと有能な艦長が乗ってもつきの悪い人だと中々士気が上がらぬそうである。自分はつきが良かったのだ。」

先生のお話には御謙遜のお気持ちも多分に入っていると思うが、人生につきというものがあることも亦真理である。日本海々戦に於ける三笠艦上の東郷司令長官の如きは、先生のお話の好適例である。先生がこの後どうおっしゃったかは忘れたが、つきには平素の勉強努力と人間としての器量大きさが必要であろう。先生はこの点について誠に御立派なお方であつたと思う。

九州に於ける先生

ユニエム物産社長
大正15年卒

宮田秀介

西日本婦人文化
サークル副理事長
昭和5年卒

河本勝寿

昭和46年秋の初めであつた。洛友会九州支部幹部が相談した結果、鳥養先生も大分身体が弱られた御様子だから、御元気で御旅行の出来るうちに、今年の九州洛友会総会に御出席いただいて、温顔に接し乍ら御慰勞申し上げようと言ふことになり、本部の山本幹事に以上の主旨を電話して、先生の御都合をお伺いして貰つたところ、御快諾があつたので一同大喜びした次第である。しかし、御旅行のスケジュールは我々は唐津↓阿蘇↓別府↓帰京を考へていたが、先生のご指示で、福岡↓唐津になって少し残念であつた。

昭和46年10月27日の支部総会には、先生は山本幹事を連れられて御元氣に出席されたので一同大喜びであつた。天神ビルの歓迎会の始まる前、先生は天神ビル10階にある私(河本)が、十数年間に育てあげた西日本第一の会員一万二千名をもつ婦人教室を視察され、仲々良いことをやっているとおほ

めの御言葉を戴いて恐縮した。宴
会終了後、宮田、河本、深町(幹
事)がお供をして、唐津のシーサ
イドホテルに御案内して、夜は玄
海名物の活きた数々の魚料理を差
上げたが、大変喜んで戴いた次第
である。翌日は朝食後ホテルを出
て、唐津市の鏡山に車で登って佐
用姫ゆかりの場所で、左側遙かか
なたに竜岐対馬を眺め、捕鯨で有
名であった呼子港、秀吉の朝鮮征
伐の第一線基地を一望に眺める。

玄海国定公園の御説明を申し上げ
ようとしていたが、車から降りら
れた先生は、眺望絶佳の広場に行
く前に一寸した坂があったので、
先生は自分は足が悪いから、ここ
で待っているから、君達で見ても
いと仰言ったので、私達は一瞬シ
ュンとなって顔を見合わせたので
ある。

福岡への帰りの車の中で、先生
は近頃物忘れもひどいことを淡々
と述べられていた。

福岡ではロータリーの例会に出
席され、終戦後のガバナー時代に
福岡ロータリーの復活に尽力され
たお話をされ、クラブ会員には深
い感銘を与えたのであるが、舞台
に立てばありし日の先生の片鱗が
出るのであろう。実に堂々たるも
のであった。

あれから五年有余、天命とはい
え洛友会としては、実に偉大な指

導者を失ったのであるが、後には
幾多の俊秀が居られるので、先生
の遺業は益々隆盛になることを信
じて疑わない。

鳥養先生への感謝

(東洋最初の超高压送電など)

法政大学名誉教授
昭和4年卒

安 達 達

朝鮮半島における電力開発、特
に東洋最初の超高压送電の実施に
当り、鳥養先生から格別のご指導
とご助力をいただき、お蔭でこれ
らの産業施設が今も朝鮮民族の繁
栄に寄与しているのを思い浮べ、
先生の数多いご事績の一端を、そ
の背景の電力事情とともに申し述
べ、追悼と感謝の辞といいたしま
す。

なお、私は青柳先生のご推薦で
卒業直後、元朝鮮総督府通信局
(現在、我国の通産省公益事業局
に該当)の技官に就任でき、終戦
時まで電気事業の行政事務を担当
しましたが、引揚後も先生からた
いへんお世話になりましたので、
これも付加してお礼申し上げます。

半島の産業開発は豊富な発電・
鉱物資源を基盤とし、国家計画と
して大正末期以降積極的に推進さ

れましたが、このうち発電・資源
の開発は貯水池式水力を主に、石
炭火力を従として、次のような特
色をもっていました。

水力資源は総督府の水力調査の
結果、国境河川を含めて約5,000
MWで、開発または着工された大
規模発電地点は半島の北半部にあ
って鴨緑江水系に属し、ダム式か
流域変更式のどれかの開発方式が
採られました。前者の代表例とし
て鴨緑江の本流を巨大ダムで堰止
めた出力(700MW)の水豊発電
所は、世界的に有名であります。
後者の方式で開発された著名な水
力は赴戦江(201MW)、長津江
(327MW)、平野、虚川江(342M
W)の発電地点群でありまして、
黄海に流下する鴨緑江の支流を上
流高原地帯で堰止め膨大な貯水池
を造り、東部海岸寄りの脊梁山脈
を貫く長大なトンネルによって日
本海側に導水し、急斜面を利用し
て大規模発電を行うものでありま
した。スケールメリットとして、
発電コストが安く日本内地のそれ
の半ないし半でありました。

火力用石炭は灰分多く着火困難
の無煙炭でしたが、大正末期平壤
で微粉炭燃焼による発電方式に成
功し、また南鮮の寧越・三陟炭も
昭和10年頃から発電開発が推進さ
れました。国民度の低い当時の半
島で、大規模電源を開発するため

には、これに見合う電力消費産業
の誘致を必要としましたが、打続
く不況下で外地まで進出する産業
財閥はごく稀でした。現に某大財
閥が長津江の水利権を獲得してな
かなか着工しないので、総督府が
斡旋して日窒系に肩代わりさせま
した。かかる時代に、旧日本窒素
肥料㈱を母体とする日窒コンツエ
ルンの創設者野口遵氏が豊富低廉
な電力と、電気化学工業の開発に
着目して進出しましたが、正に朝
鮮半島の産業開発史上の大功労者
・大恩人でありました。野口氏は
東大出身の電気技術者で卓越した
事業家でありましたが、片腕とな
って前記大水力の開発指導をした
のは久保田豊氏(現在日本工管協
会長)で、東大出身の優れた土木
技術者で、かつ有名な事業家であ
ります。

東洋最初の超高压送電(220kV)は、虚川江水力の開発に伴っ
て昭和16年5月に運転開始しまし
た。主な送電先は興南(東洋一の
規模を誇った日窒工場の所在地)
と清津でした。

わが電力界で初の高電圧送電で
すから、送電設備は合理的・経済
的に特に信頼度の高いものにする
ため、しかも大戦前で国際関係が
緊迫し、科学技術の鎖国時代であ
りましたので、日本の最高頭脳を
結集し、設計内容について審議検

討してもらう目的で、総督府主催
の超高压送電技術委員会が設置さ
れました。その委員には鳥養先生
東大西教授、元電気試験所後藤技
師を委嘱し、最初の委員会が15年
9月に開催され、種々有益な討議
と結論が得られましたが、その後
も各委員のご指導とご助力を得ま
した。

水豊発電所の建設工事中の昭和
14年秋頃、発生電力700MW(満
州側と折半使用)の送電々圧を220
KVまたは154KVのどれにする
かが大問題となりました。監督官
庁側の技師グループ(当時私が技
術係主任でグループの責任者)は
前者を、会社側(鴨緑江水電・朝
鮮送電の二社で、社長野口氏、常
務久保田氏)は後者を主張し、決
定までに数箇月を費しました。総
督府上層部は産業資本の誘致を国
策とした関係で、大低の事柄は会
社の希望をかえりやうたいとの
態度を取っていました。上司の通
信局長が「久保田氏と君の説明を
別々に聞いていると、どちらが良
いか判断しかねるので、二人で討
論して聞かせて欲しい」といいま
したので、三日間討論しました。

結局、当時の世界最高標準電圧
220KVに決定しましたが、正論
が通ったことの満足を深く味わ
いました。
先生にこの決定を報告しました

ところ、早速祝賀と慰労の長文のお手紙をいただき感激の極みでした。

終戦後、先生のお世話になって感激しましたことを、次にご披露いたします。

昭和20年11月引揚げ直後、総長室へご挨拶にお伺いしましたところ「君には就職口を特に見付けてあげたい」といついていただき、翌年9月頃京都の良い就職口をご推薦いただきました、心から感謝し

昭和51年度電気系教室

卒業生の就職・進学状況

京都大学教授 池上文夫
昭和22年卒

昭和51年度電気系三教室主任の一員として、卒業生の就職などの状況をご報告致します。

51年度の就職線戦は、昨年度の不況からやや立直りの兆しも見え、企業の採用申込みはかなり積極的になったと見受けられました。しかし、業種によっては採用を辞退された会社も多く、また採用を申込みれた企業でも人数・条件ともに厳しく、卒業生の中には第一志望の企業に採用されなかった者もかなり多い状況でした。しかし、お陰様で就職希望者の大部分は就職が内定し、四月から社会で活躍できることになりました。

ました。

昭和41年3月法大工学部長に選任され報告しましたところ、「学部長はいつも筋を通すことを心掛けないさい」との親切なお手紙をいただきました。いま回顧して適切に教訓でした。

先生の輝かしいご功績を敬慕し、かつ弟子達への懇篤なご指導を深く感謝しつつ、ご冥福を心からお祈りいたします。

一方、学部四回生の大学院進学希望者は昨年度と同様に多く、なかなか狭き門でしたが、59名が進学予定であります。中には大学院入試に失敗して来年度再度受験のため留年する者、あるいは入試に失敗して就職を志望しながら希望する企業に採用されなかったため、来年度受験のため留年する者などかなり多く、昨年度と同様の傾向が見られます。

学部および修士課程卒業生の就職・進学状況を別表に示します。博士課程在籍者9名の中では、3名が京都大学を含めて大学助手に、2名が会社で、職予定です。

電気系3教室卒業生就職・進学状況

種別	学部	大学院	就職先
官庁	1	3	電波監理局、電波研、警察庁
通信	2	5	電々公社、KDD
電力	4	5	関西、九州、中部各電力会社
交通	1	0	国鉄
総合	8	9	日立、三菱、東芝
強電	3	1	富士電機、日新電機、東洋電機
弱電	21	9	日電、富士通、松下、新日本無線、ソニー、東光、横河、立石、日本ビクター、富士通、アナック
電線	1	1	住友電工、昭和電線
製鉄	4	1	新日鉄、日本鋼管、川崎製鉄
機械	5	1	住友重機、川崎重工、東洋工業
その他	9	3	トヨタ、三菱重工、京セラ、日電、日本スクリーン、ソルタ、日本電産、真空技術、ミルタ、富永、大日本装璜、蝶理、船井電機、フタバ電子
進学	59	9	
計	118	47	

就職活動の中で、昨年度の不況以来学生の真剣味が増したことを感じましたが、まだ呑気さが残っており、学力はもろんのこと、気迫のある人材養成の必要を痛感しました。

最後に学生の採用について変らぬ御高配を頂いております洛友会々員諸兄に厚く御礼を申し上げ、また今後とも教室に温かい御支援を賜りますようお願い申し上げます。

昭和51年度情報工学教室

卒業生の就職・進学の状況

京都大学教授 坂井利之
昭和22年卒

情報工学教室から卒業の修士は第二目になり、学部卒業の学生は第四期生になりました。

就職の世話を致しました印象では、昨年の様子と比較して、格段

に明るかったように思います。学部卒業の学生の進学が多かったことも、少しは原因になるかと存じますが、絶対的に就職希望の人数が少ないうで、求人数は就職希望

者の数倍に達し、その産業分野も関連全分野にわたりました。

教室の卒業生が、いろんな分野に、適當年間隔で分布すること、国立大学であるので一企業に集中することのないよう充分配慮したつもりですが、御期待に添えない仕儀となりました点をおわび致します。

このような私共にとつてうれしい悲鳴は、昨年のきびしい就職状況とは無関係ではないこと、またいつも本年のような状況が続くとは決して思っておりません。しかし、情報工学教室の卒業生が、これからの日本の産業構造のホープの一つとなる情報産業に寄与できるような人物を育てることを目標と致しておりますし、また日本の将来をそれ程悲観していない以上、何とか就職の道が細くとも、徐々に広くなっていくことを望むのだと念願致します。

本年の卒業生の具体的な進路は別表の通りですが、情報工学教室主任として宛先を明記し、直接求人依頼のあった会社は、同表の第1欄で3、第2欄で14、第3欄で50、第4欄で24、計90社になりました。その内、学生を推薦した会社は28社でした。情報工学教室卒業生の求人希望人数を明記した求人の延人数は、第1欄4人、第2欄28人、第3欄34人、第4欄19人で計

85名です
 その他に、教室の卒業生の人員を明記していない求人、若干名と記したものが多数ありました。

情報工学教室卒業生就職・進学状況

種別	学部	修士	就職先
官公庁関係	0	3	電々公社, 国鉄
計算機製造販売(含電気メーカー)	10	9	日電, 富士通, 沖, 日本IBM, 日本ユニパック, 日立, 東芝, 三菱, 富士電機, 松下電器, パナファコム
ソフトウェア関係	1	2	日電ソフト, 東洋エンジニアリング, ビジネス・コンサルタント
製造業一般	3	3	新日鉄, 川重, 川鉄, 住金リコー, アルプス電気
サービス業一般	0	0	
進学	23(2)	1(2)	()内は他大学, 他専攻研究生など
その他	1	0	朝日放送
計	38(2)	18(2)	

就職決定 32名 会社数 23

最後に、就職に関して各方面から戴きました暖かい御援助に対して、深く感謝致しますとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。

訃報

大正4年 中川銀三郎 49・2
 大正4年 中谷 潔 52・1・18
 昭和2年 鳥谷 隆弘 51・10
 昭和5年 和田 正弘 52・1・17
 昭和49年 佐々木常雄 51・11・13
 講大14年 伊藤 善緑 51・7
 以上の方々が逝去なさいました謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

○故鳥養先生が、初代洛友会会長として会報を発刊されたのは昭和28年8月で、爾来続けられて本号は第九十九号になります。本号は先生の追悼号として、その御遺徳を偲ぶこととなりました。御多忙中御執筆を御願いた各位に厚く御礼申し上げます。紙数制限等のため、原稿の一部を割愛或いは修正しましたが、何卒御諒承下さい。(幹事記)

昭和52年度洛友会総会通知

一、日 時 6月4日(土) 午後3時より受付開始

二、会 場 八芳園(国電目黒駅下車) 東京都港区白金台一―一―

電話(03)443―3111(代)

三、日 程 東京支部総会及び本部総会 午後4時より5時

懇 親 会 午後5時より

解 散 午後7時予定

四、会 費 会 員 二、〇〇〇円

同 伴 者 一、〇〇〇円

昭和52年度卒業生 無 料

会費は、別紙総会用振替用紙にて、お払込み下さい。なお、これをもって総会出席通知に代えますので、御出席の方は、5月15日までに到着するよう御返事を御願致します。

本会合には、御家族同伴を歓迎することになっておりますので、多数御誘い合せの上、御出席下さい。

洛友会々費納入の御願い

本年より会費未納の方には、納入請求の印を押して、会報をお送り致しますので、速かに御払込み下さい。従来、会費の値上げと広告料によって赤字を切り抜けて来ましたが、会費納入率を向上することにより、健全なる運営を目指したいので、よろしく御願致します。大体の傾向としては、会員数の多い東京、関西支部、又比較的若年層に未納の方が多いたが実情です。(事務局)

電気工学界の先端をゆく電気総合月刊雑誌

電気評論

各界の権威を網羅した編集委員会の責任編集の下、電力を中心にして広く電気技術全般にわたり、平易に解説した技術革新時代の月刊誌。毎月焦点をしばった新しい技術問題の特集記事、一般論文、講座、海外文献の紹介など掲載しています。

5月号 特集・電気と安全・5月10日発売
定価 480円

I 安全に関する諸基準の方向性

- | | | | |
|----------------------------|-------|-----|----|
| 1. 電気設備基準 | 通産省 | 小木曾 | 勝也 |
| 2. 感電死亡災害の発生状況と感電災害の防止 | 労働省 | 内山 | 正雄 |
| 3. 放射性同位元素等による放射線の被ばく線量の管理 | 科学技術庁 | 寺島 | 千明 |

II 新しい技術と安全

- | | | | |
|------------------|-----------|----|----|
| 1. 技術と安全 | 職業訓練大学 | 青島 | 賢司 |
| 2. 高度電化社会と電気安全基準 | 千葉大学 | 川瀬 | 太郎 |
| 3. 人間行動特性から見た安全 | 中京大学 | 神作 | 博男 |
| 4. 安全に関する電気知識 | 電気学会通信教育会 | 相木 | 一男 |

III 作業と安全（行動災害対策）

- | | | | |
|---------------------|----------|-----|----|
| 1. 水力発電所の作業と安全 | 電源開発 | 酒井原 | 彊信 |
| 2. 火力発電所における災害の防止対策 | 関西電力 | 杉山 | 光彦 |
| 3. 原子力発電所の作業と安全 | 日本原子力発電 | 本原 | 力茂 |
| 4. 送電線の作業と安全 | 中部電力 | 後藤 | 茂夫 |
| 5. 変電所の作業と安全 | 九州電力 | 成松 | 澄彦 |
| 6. 配電線の作業と安全 | 東京電力 | 守安 | 智彦 |
| 7. 需要家設備の作業と安全 | 関西電気保安協会 | 坂本 | 龍雄 |

IV 電気工事と安全

- | | | | |
|-----------------------|--------|----|---------|
| 1. 大型送電線工事における安全対策の一例 | 関東電気工事 | 吉田 | 昌三 |
| 2. 配電工事と安全 | 近畿電気工事 | 平山 | 照行・浅野耕一 |

[その他]

(一般論文) テクノロジ・アセスメント、(海外文献紹介) ソ連のMHD発電、風力発電の現状と将来

株式会社 電気評論社

(本社)

〒606 京都市左京区田中大堰町49

電話 京都(075)701-2582